

日本の歴史 31

『明治の音：
西洋人が聴いた近代日本』

内藤高著（中公新書 中央公論新社 2005）

本書の請求記号 210.06||Nai

稲垣 宏行

音と言っても、楽器の音、雨の音、虫の声など、我々の生活の中には無数に存在し、感じ方も人によって異なります。例えば、バスや電車内での会話は、する人にとっては楽しいものでも、それ以外の人にとって不快に感じる場合があります。このことは本書に登場する明治期の西洋人たちにも当てはまります。

イギリスの女性旅行家イザベラ・バードは、1878（明治十一）年に日本を訪問しましたが、そこで聴いた琴や笙の音色は「苛立たせる以外の何物でもなかった」と感じたといえます。バードより一年早く来訪したアメリカの動物学者エドワード・モースは当初、労働者たちの掛け声や歌声を「根拠がなく非効率なもの」と捉えていました。フランス人作家ピエール・ロチも、日本の日常生活の音を雑音と捉えていて、日本人の風貌や考え方などについても良く思っていないでした。逆に、イギリス人作家ラファディオ・ハーン（小泉八雲）のように、音を含めた日本文化全体に対して肯定的な評価を下す人も本書に見られます。

バードは日本で鑑賞した能や謡曲の延びた母音にも言及しており、「その声を聞くと、野蛮人の間に入っているような気分になる」と言いました。彼女がこのように感じた理由には、子音に重点を置く西欧の言葉と、母音に重点を置く日本語との言語構造の相違が関係していると著者は考えています。モースやロチが日本人の会話は単調で騒々しいと感じたのも、この言語構造の違いによるものだと思います。ただし、フランスの詩人・劇作家のポール・クローデルのように、日本語の母音に興味を抱き、「起源の言語」と肯定的に捉える人もいました。

モースは無意味と感じる掛け声や歌に対しては批判的でしたが、労働の効率化のためというように、何らかの意味を持つ音であれば理解する姿勢も示しています。日本自体に批判的だったロチ

も、お菊という日本人女性が弾く三味線の音や日本に生息する蟬の声（彼は当初、騒音と感じていましたが）に興味や趣も感じるようになりました。また、ロチの著作は、日本に対する捉え方が対照的なハーンに音への関心を抱かせたことも本書で述べられています。彼らも決して日本に対して批判的な見方をしている訳ではなかったようです。

バードらが日常生活の音を観察していたのに対し、ハーンは主に虫や小動物の鳴き声に注目していました。中でも目をひくのが、彼が蟬を「稀に見る名歌手」と評し、文学的見地から強い関心を示していたという記述の部分です。その理由について、蟬がギリシャ神話で愛される昆虫であり、ハーンがこの神話の影響を強く受けていたからだとして著者は指摘しています。

日本の音に対する評価の違いは、各々の主観によるところが大きいようです。そこには日本に対する好意の度合い、若しくは当時一般的だった自国文化への優越感も関係するのかもしれませんが、しかし、西洋人たちが関心を持った音の種類やどの観点から日本の音に対して評価を下すに到ったかなどはそれぞれ異なっています。日本文化や日本人の感性への好意や嫌悪という視点だけでは推し量れないと思います。

音という視点から描かれた明治期の日本の姿には、通常の歴史書では見られない面白みが感じられます。また、彼らの音についての緻密で技巧的な記述から、日本の音の特徴や彼らの音に対する感じ方などで、今まで気づかなかった部分や意外性を感じさせられた部分も発見できます。そして、彼らの意見は日本と西洋の文化的違いと当時の西洋人が持っていた価値観の有り様を我々に提示してくれています。

いながき ひろゆき（司書・情報サービス課）